

ヤンキー娘に大もてした侍ボーイ：立石斧次郎

2013.1.8

(2020.9.20 追補)

西田 巖

1. 万延遣米使節団の概要

今から約 160 年前、明治維新前夜、幕末混乱期の万延元年（1860 年）、わが国初の異例ともいふべき超大型の外交使節団が太平洋を渡りアメリカに向かった。使節団の任務は、2 年前の 1858 年 6 月に締結した「日米通商友好条約」の批准書交換をワシントンで行うためであった。使節団は、新見正興（しんみまさおき）（外国奉行兼神奈川奉行（豊前守）、38 歳）を正使として総勢 173 名であった。一行は 2 班に分かれ、第 1 班は、正使・新見正興ら 77 名が米艦ポーハットン号に乗船し万延元年 1 月に横浜を、第 2 班は、ポーハットン号の随伴艦として軍艦提督・木村喜毅（きむらよしたけ）（摂津守、31 歳）率いる 96 名が日本船籍の咸臨丸に 乗り組み品川を出港した。（参考：咸臨丸には、勝鱗太郎（海舟）が軍艦提督につぐ艦長として、福沢諭吉が木村提督の従者、また、9 年前の 1851 年にアメリカから（琉球に）帰国した中浜万次郎（ジョン万次郎）が通弁方として乗船してい

た) 一行は、ハワイ経由でサンフランシスコに到着し(3月)、現地で大歓迎を受けた。多くのアメリカ人からすれば、はるか太平洋の向こうの「日本」の刀を腰に挿したチョンマゲ姿の日本人が大変珍しかったのであろう。一行の動静は現地の新聞でも詳しく取り上げられその記事は今も記録に残っている。

ポーハタン号の正使・新見正興らの一行は、サンフランシスコで随行艦の咸臨丸と別れ(咸臨丸は太平洋横断の帰路につく)、パナマまで南下し、パナマを鉄道で横断し大西洋に出て再び海路で北上しワシントンに向かった。ワシントンで無事「日米通商友好条約」の批准書交換の目的を果たしたあと一行は大統領ジェームス・ブキャナンとの謁見やいろいろな晩餐会などの大歓迎を受け、また、各地の工場なども見学した。

2. 立石斧次郎の人物像

さて、第1班のポーハットン号に乗った使節団の中に、立石斧次郎という



17歳の少年が通詞見習と随行していた。

この立石斧次郎という若者は、謹厳実直を旨とする日本の侍とは大いに違いヒョウキン者であつたらしい。そこでたちまち艦内の人気者になるだけでなく、アメリカ上陸後も、明るい性格、ユーモアセンスで現地の

の歓迎会などでたちまち人気を博するところとなり、「トミー」の愛称で呼ばれるようになった。一説では、彼が泊まるホテルには大変な数のファンレター（ラブレター？）が届き、また、ニューヨーク・ブローウエイでのパレードでは女性からもハンカチをもらいそれを群衆に振るなど、他の一行からすれば眉をしかめるような振る舞いがあったといわれる。彼の人気ぶりを出すものとして、「トミーポルカ」という曲も現れたほどである。（「トミー・ポルカ」のmp3および楽譜は下記参考資料のサイトから入手可）首都ワシントンで、無事、「日米通商友好条約」の批准書を交換し、米大統領主催の晩餐会等の公式行事も終え、2か月ばかりアメリカに滞在したのち、正使一行は、ニューヨークから米艦ナイアガラに乗船し大西洋横断、喜望峰経由の東回りで帰路につき、世界を一周して11月に帰国した。おそらく彼

らが、世界一周した最初の日本人ではないか。帰国後、斧次郎は、米田桂次郎と改名し幕臣としてアメリカ公使ハリスの通訳にもあたるなど英語を生かす仕事についた。その後、明治維新の時に幕臣として戊辰戦争に参戦し、官軍に左腿を撃たれ重傷を負った。維新後、外国経験を乞われ、新政府より岩倉具視の遣欧使節団に参加要請を受け、1871年（明治4年）10年ぶりに再度アメリカの土を踏んだ。二度目のアメリカ滞在中、彼の浮名の記録はない。ひよっとすれば、岩倉具視以下使節団の幹部から行動について注意を受けていたか、それとも、彼が、10年という年をえて落ち着きを得たいたのであろうか。（もっとも、薩摩、長州を主体とする使節団の中であって、もと賊臣であった彼は、団の中では居心地の悪い立場であったかもしれない。）

その後、彼の人生は、工部省の役人や、北海道で開拓史にもなったようで、役人をやめたあとハワイに渡って移民監督官になったがうまくいかず2年で帰国し、47歳の時、大阪控訴院の通訳官などの仕事についた。最晩年は、西伊豆の戸田（へだ）村（現・静岡県沼津市戸田）で孫たちに囲まれて暮らし1917（大正6）年享年75歳で没した。

3. 万延元年遣米使節団の派遣費用

(1) 全費用はアメリカもち

ポーハタン号、咸臨丸の日本人使節のアメリカでの交通費、ホテル代などすべての経費はアメリカ側が負担した。また、サンフランシスコ、ニューヨーク、ワシントンなどでの歓迎レセプション費用も合衆国政府、および各地の市当局が負担した。このような日本に対する異例なほどの好待遇は、日本を開国に向けアメリカが先陣を切り、また、アメリカの先進国振りの第一印象を使節団の幕府役人に与え、以後の、日本がイギリス、ロシアなどの他国に日本が誘惑されないようにしたといわれている。

(2) 日本側の準備金

ポーハタン号：幕府は金6万両を準備し、これを洋銀（メキシコドル）78111ドルに替え船積み、サンフランシスコで77329ドル89セントに両替した。幕府の御用金以外にも使節は3000両を拝借し持参した。

咸臨丸：洋銀8万枚を船積み。うち、7万900余枚は日本に持ち帰った。軍艦奉行・木村喜毅（31歳）は、出帆前に自分の財産を売り私財として3000両を用意し、幕府からの借入金500両、計3500両を準備して出発した。悪天候のもと荒海を乗り切り、無事、

サンフランシスコに到着したが、その航海にあつたてはブルック大尉以下アメリカ人乗組員の指導によるものが大であった。帰路でブルック大尉別れるとき、木村は大尉に厚意を示すため好きなだけのお金を受け取るよういったが、彼は、日本人を無事アメリカに紹介できただけで十分といい、丁重に断った。

4. 幕末外交情勢のおさらい

万延元年の遣米使節団は、2年前の1858年6月に締結された「日米修好通商条約」をワシントンで批准することが目的であった。

維新前、徳川幕府が鎖国を続けるころ、我が国周辺に欧米列強がひたひたと進出してきた。就中、1853年6月、アメリカの東インド艦隊のペリーが4隻の軍艦を率いて江戸湾に侵入し、幕府に強く開国を迫ってきた。ペリーは幕府の開国の回答を得るため翌年1854年1月に軍艦7隻を率いて再び来航した。幕府は米の圧力に抗しきれず「日米和親条約」を結び下田、函館の開港を認めることとなった。このアメリカとの和親条約締結が契機となって次々と、イギリス、ロシア、オランダなどと同様の条約を結び、ここに、（長崎の出島でのオランダと清国との通商をのぞいて）200年以上

続いた我が国の鎖国政策は終焉した。

日米和親条約の締結後に下田に領事館を置いた米総領事のハリスはさらに「通商条約」の締結を強く幕府に迫り、大老・井伊直弼は朝廷の同意を得られないまま、和親条約の締結4年後の1858年「日米修好通商条約」に調印した。

この「日米修好通商条約」の批准を目的として1860年（万延元年）1月に遣米使節団が出発したが、一行がサンフランシスコに到着した1860年3月に、この条約を調印し幕府を鎖国から開国への大転換を断行した井伊直弼が桜田門外で尊皇派に暗殺された。このころの国内では、朝廷の勅許なしで開国した幕府方と、朝廷の同意なしでの開国はケシカランとして「尊王攘夷」を大義にして幕府を倒そうとする薩摩、長州主体の討幕派との対立の混迷が続き（「禁門の変」、「鳥羽伏見の戦い」など）、幕藩体制が弱体化していた徳川幕府はついに1867年10月「大政奉還」を朝廷に行い、翌1868年4月に250年続いた徳川幕府本拠の江戸城を無血開城して、ここに幕府は消滅し明治新政府が発足した。（明治維新）

（維新に対する個人的疑問）

★「攘夷」の大義はどこに消えた

薩摩藩、長州藩は「尊王攘夷」を大義にして徳川幕府を倒した。ところが、薩摩藩は、生麦事件に関連して 1862 年 7 月にイギリスによって鹿児島を火の海にされ、同じく、長州藩は 1864 年 8 月、英・米・仏・蘭の 4 か国の艦隊により下関が砲撃され、欧米列強の圧倒的武力をまのあたりにしてそれまでの「攘夷」固執の無理を知り一転して開国派に転じた。今で言う「総括」、「説明責任」なしにいともあっさりと「攘夷」の大義を捨てた。

(注：江戸幕府は、外国からの実際の武力攻撃は受けることなく、言い換えれば武力衝突を回避して鎖国から開国への大転換を決定した)

★なぜ「東京（江戸）」に遷都、天皇を東京に？

1867 年徳川慶喜による「大政奉還」の上表、これを受け朝廷側（新政府）は「王政復古」の大号令を発し、翌 1868 年 4 月江戸城の無血開城を受けて江戸を「東京」と改称、そして元号を明治と改元して東京を首都とした。

(これからの自分の勉強にしたいが) 疑問は新政府はなぜ東京を首都としたのだろうか？当時、東京は確かに世界有数の人口を抱えた消費都市であったが、まだまだ徳川の残党もあり治安上は危険ではなかったか（例えば、彰義隊との上野の戦、さらには東北の会津奥羽列藩との戊辰戦争の遂行）。流通や経済活動の規模からすれば首都は大阪でもよかったのではないか？

また、天皇は東京に行幸され、そのまま不倶戴天の敵であった徳川幕府の居城の江戸城を禁裏とされた。天皇と帯同した京都のお公家様も、粗野な坂東武者のいる江戸への東下りなんかトンデモナイと抵抗されたであろうが、しぶしぶ東京に移られたと思う。(ひょっとしたら、平将門のタタリを本当に恐れるお公家様もいたかもしれない。)

新政府は、天皇の御旗を掲げ官軍として徳川親派の残る東北の各藩を賊軍として戊辰戦争を始めた。維新前までは徳川各藩の庶民は、言葉として天皇(天子様)は知っていたかもしれないが、忠孝を尽くすのは藩のお殿様であって、天皇陛下への忠孝心は無かったであろう。新政府は維新の大きな目的として徳川の藩をつぶし(廃藩置県)その庶民を“藩の領民”から日本の“天皇の臣民”に大転換の意識替えすることにあつた。

明治新政府の功績として、文明開化、議会の設置、“士農工商”の身分制度の廃止など日本の近代化につながる功績は多々あるが、新政府が天皇を傀儡として祭り上げ、「教育勅語」、「軍人勅語」を通じて全国民を天皇の臣民として徹底的にマインドコントロールしていった。

明治新政府以降、天皇を傀儡として利用する施策は明治、大正と続き昭和に入り太平洋戦争の終戦まで続いた。1941年12月、政府は御前会議で天皇の聖断をいただくという形式で日米開戦を決定し、4年後の、350万人もの犠

犠牲者を出した戦争の終結も、御前会議で天皇のご聖断を得て決めたという形を取った。昭和天皇は、政府・軍部の連中に祭り上げられて利用されたということをどのように心中思われていたことだろう。この証は、戦後、A級戦犯が靖国神社に合祀された後、昭和天皇は勿論、平成天皇も、今上天皇も靖国神社を参拝されていないことで明らかではないか。

<参考資料>

万延元年の遣米使節団 宮永 孝、講談社学術文庫

中濱万次郎 「アメリカを始めて伝えた日本人」 中濱 博、富山房インターナショナル

世界を見た幕末維新の英雄たち 新人物往来社

詳説日本史図録 山川出版社

日本の歴史（巻 24 明治維新） 小学館

咸臨丸子孫の会（ <http://www.kanrin-maru.org/>）

「トミー・ポルカ」
<http://www7b.biglobe.ne.jp/~howdytommy/child/tommypolka.htm>